立命館の民主主義を考える会 元教職員

NEWS 15号

2008年11月 21日発行

【私の意見】「考える会」発足１周年を前にして、現局面について思うこと―佐々木 嬉代三
≪私もひとこと≫ 山口 定 元政策科学部学部長
●編集後記：“木に竹を接ぐたぐい”の職場訪問―学園トップの“御巡幸”

【私の意見】

「考える会」発足１周年を前にして、現局面について思うこと

「立命館の民主主義を考える会（元教職員）」
副代表 佐々木嬉代三

はじめに

昨年12月23日に呱々の声を上げた「立命館の民主主義を考える会（元教職員)」は、間もなく１年のサイクルを終えようとしています。当初は、一方で教職員の賃金カットを強行しつつ、他方で（前）理事長・総長に退任慰労金１億６千万円をお手盛り支給するという理事会の独善的姿勢に憤慨し、こうした独善が平然とまかり通る学園の民主主義の状態を憂うるところから、私たちの運動は出発しました。その後、本年４月に行われた生命科学部の特別転籍問題が社会的に指弾され、５月には補助金の 25%カット（15 億円）が公表され、６月には私立大学連盟の不適正支出問題が発覚し、連盟の財務担当常務理事を務めていた長田豊臣理事長（前総長）の責任問題が浮上しました。７月には特別転籍問題と関わって、政府開発援助就学援助金（留学生の授業料減免に関わる補助金）がＡＰＵで３億円、立命館大学で５千万円、それぞれ２年間カットされることが明らかになり、また文部科学省の方針として「競争的資金」の立命館への不採択が報道されました。これらはいずれも、理事会が直接責任を負うべき由々しき事態だと思いますが、いまだに釈明と部分的な役員報酬の削減以上のことはなされておりません。責任を取る潔さはおろか、責任の重さを自覚する能力さえ失われているようなのです。

同時に、学内では理事会の一部、常務理事たちから構成される常務会の専断的体制が維持され、過去数年に亘る教授会の議論の軽視と教職員組合や学生自治会の意見の無視が継続されました。そして、それを象徴的に示す出来事として、本年７月に学友会費の代理徴収を廃止する方針が学生代表に通告されました。全構成員自治の一翼を担う学友会を財政的に追い詰め、その解体と変質を図る狙いは明らかでした。直ちに学生と教職員が呼応して「7.15 立命館の危機を克服し、新たな学園創造をめざす大集会」が催され、短期間の呼びかけにも関わらず 750 名を越える学生・教職員・卒業生が結集し、学園の第３次民主化闘争の必要性が熱く語られました。おそらく、この結果を反映してのことと推察されますが、常任理事会は９月に入って「2009年度学友会費の代理徴収を受託する」旨の決定を行いました。ただし、そこには代理徴収廃止の提起が、物言う学友会を切り崩し、物言わぬ学生組織に変質させて理事会の専断的体制を強化し、結果的に全構成員自治を踏みにじるものであったことへの反省は、全く含まれておりませんでした。無責任であると共に、無反省でもあったのです。

風向きの変化

しかるに、このところ風向きが変わったという声が、聞こえるようになりました。一つには、9 月 10 日に理事長と総長の連名で「教職員の皆さんへの呼びかけ」が出され、「学園執行部に対する不信感や距離感を早急に克服する必要性」が語られたからです。また 9 月 19 日には組合 4 役と 5 人の常務理事との懇談会が開催され、信頼回復措置の必要性や教職員の処遇の改善などの方向性が示唆されたそうです。そして、それを裏付けるように、これまで打ち切られていた「特別任用教授」制度が復活され、しかも 4 年前に遡って適用されることになりました。一時金カットに見合うような賃金の見直しも行われるのではないかという話も伝わってきます。理事会はどうやら処遇の改善を通じて信頼回復を図るという戦略を立てているのだと思われます。処遇の改善自体は教職員の要求に叶うものとして誠に喜ばしいのですが、その影で放置されようとしているものが何であるのか、我々は見極める努力を怠ってはなりません。さもないと、鞭に代わって飴が与えられるという、人間管理の最も初歩的な方針に、乗せられることになるからです。

実際、無責任であるとともに無反省であるという常務会の体質には、何の変化もないように見受けられます。社会的に指弾され、文科省に睨まれ、他大学から疎まれて、立つ瀬のない状況に学園を追い込んだ責任を、学園の最高責任者を自任する理事長が認めたことは一度もありません。総計 20 億円を越える補助金カットを招いた経営上の責任、私大連盟の不正経理に財担常務理事として長年携わってきた責任、この二つの責任だけでも途方もなく重いはずなのですが、耳に入ってくるのは無責任な放言や言い訳ばかりです。しかも、この理事長の居直りを座視する理事会も、立命の経営責任をどう取り、立命人の誇りをどう守ろうとしているのか、これも今のところ全く見えてきません。飴を与えて回避しようとしているのが反省と責任であるのならば、飴のみならず鞭をも手にして理事会の、なかんずく理事長の責任を問い続けなければならないでしょう。さもないと、立命館大学は自浄能力を持たぬ大学という烙印を捺され、文科省から指弾された「管理運営上の適正さの欠如」を放置したまま、次の補助金カットを迎えるという最悪の事態さえ想定されるように思われるのです。

現役の活躍

この間、フォーラム等を通じて、多くの人々が問いかけていたのは、何故「平和と民主主義」を教学理念とし、全構成員自治を謳っていた立命館大学が、理事長を軸にした専断的な管理運営を許してきたのか、ということでした。そして、次第に明らかになったのは、理事長と総長の指名人事たる常務理事や副総長の数が大幅に増え、学部長理事の権限縮小をはかる方策が意図的に追求されていたことであり、常務理事中心の常務会が結束して理事会を切り回している構図であり、権限の定かでない総長・理事長室長が初芝学園など対外的な関係をめぐって暗躍している姿でありました。いや、それどころか、学外の一般理事も実質的に理事長の指名になっているのですから、理事長の責任を不問に付す体制が予め出来上がっていたといわなければなりませんし、総長選挙規程も 2005 年には改定され、理事長の思うがままになる総長を選任する仕組みが完成しています。要するに、「平和と民主主義」という教学理念の現実化を保障する法的・制度的枠組みが十分整っていなかったところに、教学理念を掘り崩すような仕組みばかりが導入され、この期に及んでなお組織的な反省と責任が取れない事態に立ち至っているのです。

ですから、私たちは自らの手で民主化に向けた改革の展望を切り開かなければなりません。嬉しいことに、教職員組合が主催した秋闘総決起集会では、現役の職員が学園民主

化に向けて積極的な発言を繰り返していました。また、現役の教職員が中心となった「総長公選制を復活し、学園民主主義を実現する会」が動き始め、呼びかけ文が配布され、呼びかけ人の組織化が進行しています。私たちが期待していた現役の教職員の動きが秋以降急速に早まり、そのうねりが次第に高まりつつあるのです。私たち「考える会（元教職員)」は、こうした動きの背後に控えつつも、こうした動きの精神的支柱として立ち続けると共に、的確な現状分析と方針が打ち出せるよう理論的にも貢献したいと考えています。今回の提起はその第１歩ですが、今後も「ニュース」を通じて学園内部の動きをお知らせし、私たちの果たすべき役割を具体的に示すつもりです。元教職員の皆さん、どうぞ期待を込めて、現役の動きを注視してください。（2008.11.17 記）

◎　初代の立命館大学政策科学部長・山口定名誉教授より、「立命館の民主主義を考える会」代表(芦田　文夫)が「考える会」ニュースと一緒に送った組合ニュース「ゆにおん」No.77 号を読まれて、芦田代表宛に、次のような激励の書信を頂きましたので、ご紹介します。

《　初代の政策科学部長・山口定名誉教授より、励ましの言葉　》

前略

お送りいただきました『ゆにおん』紙上の「緊急提言」、とりわけ「信頼回復の３つの道筋と７つの緊急措置」を拝見し、大変心強い思いをいたしました。

この御提案に全面的に賛同いたしますとともに、そのことを公表していただくことにも異存がありません。小生も元職組委員長でもあり、この提言の行方が立命館民主主義の行方を決めるものと思います。関係者の御努力にも敬意を表します。

草々

◎　<u>退職教職員・「ニュース」愛読者のみなさん！</u>

現役教職員が中心に企画した、下記のシンポジウムが開催されます。(同封のニュース参照)「考える会」発足１周年にあたる月に、このような企画がされたことを歓迎するとともに、「考える会」(元教職員)の世話人会はシンポジウムを成功させたいと思います。

師走に入りご多忙とは存じますが、現役教職員の運動を励ます意味でも、積極的に参加されますよう呼びかけます。

学園のあり方を考えるシンポジウム　第１回

～総長公選制を復活し、学園民主主義の実現をめざして～

日時：12 月 5 日(金)　１８時３０分～（１８時開場）

場所：朱雀キャンパス　１Ｆ　多目的室

主催：立命館教職員組合連合

※豆ニュース：立命教職員組合連合が、一時金カット分を回復させ、「緊急提言」に沿った政策を具体化を迫った深夜に及ぶ１９日の団交は、春の 0.6%の体系是正とは別に５．７％回答を得て、学園づくりの「信頼回復」の“第１歩”と評価して妥結しました。

【編集後記】

“木に竹を接ぐたぐい”の職場訪問ー学園トップの“御巡幸”

「考える会」ニュースＮｏ．１４号の「編集後記」で「朱雀キャンパス７Ｆのいごこちの良さ」を指摘しましたが、そのことが気になったのか、現場の意見を無視した政策を強行する学園トップに対する批判を避けるためか、主に朱雀本部棟で行っていた常任理事会をキャンパス巡回して衣笠・ＢＫＣでも開催するようになりました。

そして、常任理事会の終了後、総長、理事長、総務担当常務理事、時には副総長も加わり、総務・秘書両課長をも伴って、職場の若手と懇談したいという趣旨で“御巡幸”がはじまりました。これまで、衣笠の学生オフイスを手始めに毎週１ヶ所（入学センター、総合理工学院）を訪問、懇談が行われています。

もともと現場を知らなすぎる学園トップに対し、“現場の叩き上げ理事長”とマスコミで褒めちぎられた前理事長＝現顧問が、本部棟７Ｆで「自分を見習え」と尻を叩いているのかも知れません。しかし、これとて教職員から見れば“木に竹を接ぐ”サービスのたぐいでしょう。ある学部(教授会)では“社長・頭取の支店めぐり”（川本前理事長講演録『改革の哲学』50 ページ参照）の目的・若手選考基準が定かでない、と断られています。

日経新聞などで、現場の従業員と懇談する企業のトップが紹介されていますが、それらの人々は元々“現場の叩き上げ”経験を生かして、現場の悩みを聞き、励ましているのです。これまで聞く耳を持たない姿勢をとっていた学園トップが、教職員の信頼をなくし、不信感が蔓延しているのに、「距離感を早急に回復」したいと思って“御巡幸”を行っても、「延命」効果はいかほどでしょう。

本当に教職員の信頼を回復し、「学園全体の結束をはかり、学園の社会的信頼を回復することが重要」と考えているのであれば、この間の学園トップが行った行為（一時金カット、退任慰労金倍額支給、特別転籍問題と補助金削減、私大連盟の不適切支出等）を真摯に反省し、自分たちの責任を明確に取るべきです。それらの問題に対し、顧問、理事長は依然として「たいした問題ではない」という態度を取っているようですが、こうした態度こそが許しがたいことです。

先に教職員組合が提起した「緊急提言」に沿って人心一新をはかり、働きやすい職場作り・学園作りを今こそ急がなければなりません。時代を切り拓く原動力は青年です。学園の“未来を信じ未来に生きる”青年が役割を発揮できるよう熟年者の知恵と援助に期待します。

今後、“支店めぐりー御巡幸”に選定された職場は、構成員一丸となって「緊急提言」についての見解を問いただし、職場要求の解決を迫る職場団交と位置づけてお迎えしてはどうでしょうか。（M&H）

事務局連絡先：〒603-8577　京都市北区等持院北町 56-1　立命館大学教職員組合　気付
「立命館の民主主義を考える会（元教職員）」
TEL:075-465-8200（宮澤気付）FAX:075-465-8201
メールアドレス rits.democracy@gmail.com
ホームページアドレス http://rits-democracy.blogspot.com/